

# 評価グリッド法を用いた生活環境の望ましさについての検討

稲見 有伽子

本研究では、生活環境の「望ましさ」についての評価項目や認知構造を解明することを目的として、生活環境の評価を行う。環境評価に用いられる手法の一つである評価グリッド法は、実験者の意図を入れずに、実験参加者自身の言葉から評価項目を抽出できる点で有効である。評価グリッド法においては従来、環境の「望ましさ」の評価項目を得る際に、「望ましさ」と「望ましくなさ」どちらの立場で尋ねても、得られる評価は同じであるとして、「望ましさ」からの観点のみで実験を行う場合が多かった。しかし、「望ましさ」からの観点(ポジティブグリッド)で考える場合と、「望ましくなさ」からの観点(ネガティブグリッド)で考える場合で、得られる評価が異なるかどうかを検討した研究はほとんどない。そこで、ポジティブグリッドとネガティブグリッドで得られる評価の違いが見られるのかについて検討を行うことは、人々の生活環境に対する認知構造を明らかにする上で意義があると思われる。

本研究では、生活環境の風景(視聴覚刺激)について評価項目と項目間の関連性について検討するため、以下に述べる2つの実験を行った。まず、実験参加者を2群に分け、風景(視聴覚刺激)を呈示した。片方の群にはポジティブグリッドで、もう片方の群にはネガティブグリッドで、生活環境の評価項目を尋ねた。各群、実験参加者から得られた発言のうち、出現頻度が高いものを評価語として採用し、それを用いてSD尺度を作成した。次の実験では、作成したSD尺度を用いて、先ほどの実験で使用したものを同じ風景(視聴覚刺激)を評価させた。ここで得られた尺度値を評定値とした。

得られた評定値を基に、グラフィカルモデリングを行い、連鎖独立グラフを作成した。これを初期モデルとして、共分散構造分析(パス解析)を行い、「望ましさ」、「望ましくなさ」の要因構造モデルを構築した。その結果、「自然が多い」、「広い」、「田舎だ」、「静かだ」、「安全だ」、「便利だ」、「住みやすい」、「落ち着く/リラックスできる」は、両グリッドで共通の項目として見られた。また、両グリッドで間接効果が見られたパス全てが、「落ち着く/リラックスできる」もしくは「住みやすい」へと収束した。また、直接効果を表すものも含めてパスを見ると、「自然が豊かだ」→「静かだ」→「落ち着く/リラックスできる」→「望ましい」などといった共通のパスも見られた。これより、両グリッドで共通した項目や認知構造が存在することがわかった。しかし、両グリッドで「自然が豊かだ」→「静かだ」へのパスが見られるにも関わらず、その後「望ましい」への繋がり方が違っていったことから、ポジティブグリッドとネガティブグリッドのアプローチの違いで、認知構造や重要視する項目が一部異なることが考えられる。

以上より、生活環境を「望ましさ」の観点から評価する場合と、「望ましくなさ」の観点から評価する場合で、得られる評価項目に違いが見られ、私たちの環境評価における認知構造も異なっていることが示唆された。(環境行動学)